



非認知能力と園保育目標・学校教育目標

学校教育課 参事 安岡 寛

「ゆたかな心」

ゆたかな心。

多くの園、学校における園保育目標や学校教育目標に組み込まれている言葉の一つです。

子どもたちがゆたかな心をもつて、大事ですね。「ゆたかな心を子どもたちに育みたい」という思いをもつことは、ごくごく自然なことです。

子どもたちと関わっていると、「ゆたかな心が育っている」と実感する場面に出会うことがあります。

ところが、「〇〇さん、最近、ゆたかな心が育ってきたよね。2か月前と比べて50点上がったよね。」というわけにはいきません。「ゆたかな心が育っていること」を、客観的に点数化(数値化)することができないからです。

計算や漢字など、客観的に数値化できる力を「認知能力」と呼ぶのに対して、「ゆたかな心」などは「非認知能力」と呼ばれるものです。

子どもたちに育みたい非認知能力

こども家庭局と教育委員会が連携して取り組んでいる栗東子育て教育 Next プロジェクト。

「栗東市の子どもたちに非認知能力を育むこと」を目指してのプロジェクトですが、保育教育に携わる皆さんに少しずつ浸透してきています。

プロジェクトでは、子どもたちに育みたい非認知能力として、次の「3つの力」を掲げています。

①自分を高める力

自分の状態をさらに良い状態にするために必要な力です。物事にチャレンジしようとする「向上心」や、自分を大事にできる「自尊心」、前向きに考えることのできる「楽観性」等があてはまります。

②自分と向き合う力

自分の気持ちや状態を落ち着かせるために必要な力です。自分の気持ちをコントロールする「自制心」、物事にねばり強く取り組む「忍耐力」、自分を客観的に見つめることができる「俯瞰力」等のことです。

③他者につながる力

他者(相手)と協働するために必要な力です。他者(相手)を尊重すること、思いやること、上手くコミュニケーションをとること等を指しています。

この3つは、社会で生きていくために求められるもので、私たち大人にとっても必要なものです。だからこそ、子どものうちから3つの「つけたい力」を育むことが大切だと考えています。

非認知能力のフィルターを通すと

自分の所属校園の目標や、めざす幼児像・子ども像を、非認知能力のフィルターを通して見てみましょう。

先述した「3つの力」に関連する言葉が必ず見つかります。

例えば、「自ら進んで」「意欲的に」といった言葉は「自分を高める力」にあてはまります。「最後までやり抜く」「ねばり強く」は「自分と向き合う力」ですし、「相手を思いやる」「友だちと支え合う」なら、「他者につながる力」が該当しますね。

このように非認知能力のフィルターを通してみると、園や学校の目標やめざす幼児像・子ども像は、非認知能力に直結していることがわかります。

そして、私たちは、子どもたちの非認知能力を育みたいと考えていることが見えてくるのです。

子どもたちに非認知能力を育むことは、特別なことをするわけではありません。

肩に力を入れず、自然体で取り組みましょう。



語り合い・学び合うコミュニティが 保育・教育力を高める

幼児課 参事 内田 祥子

主体性を育む保育・教育を考える

子どもたちにどのような力を育てていきたいのかを考えたとき、『主体的に自らものや人にかかわる力が重要だ』と最初に思い浮かべられる先生が多いのではないのでしょうか。これはまさに、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の総則に記載されていることであり、日々、保育・教育を行っていく中で、私たち保育者が目指し、探求し続けるテーマだと言えます。

どんな姿が主体的な姿なのか

子どもが主体的に活動するためには、保育者が環境を整えたりかかわったりするなどの働きかけが必要です。そこから子ども側からの働きかけがあることにより、子どもが主体的に動いていきます。「やってみたい」「楽しい」「好きだ」という思いがもっと活動していくことを支え、友達や保育者がそれを共有し、共感していくことで、そこに価値を見出していきます。

つまり主体的な姿とは、心の安定があり、一つ一つの遊びが満足に満ちていて、周りに認めてもらえる体験があり、「楽しい」と心が動く姿と言えます。

主体的な姿と非認知能力

幼児期の遊びの中の学びは、その大半が非認知能力だと言えます。客観的な点数にできない『自分を高める力』・『自分と向き合う力』・『他者とつながる力』のこの3つの非認知能力は、主体的な活動を通して育ち、さらには今後の主体的な活動の支えになっていくと考えます。保育者は、子どもの姿からこの遊びの中の学びを見とるという重要な役割を担っています。

子どもの姿を語り合う職員コミュニティ

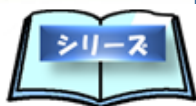
日々の遊びの中の子どもの主体的な姿について、園内の公開保育や研究協議の中で話し合う場面があります。主体的な姿を『やってみようの気持ち芽生えたとき』『子どもの心が動いたとき』と捉えて、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿(*)に照らし合わせながら、様々な子どもの姿を付箋に書き出し、職員間で語り合っておられる園の実践を聴かせていただきました。自分の考えだけではなく、様々な視点から子どもの姿を見つめ、語り合うことが、より子どもの主体的な姿をみとることにつながっていきます。そして、この語り合いにこそ保育者の学びがあり、互いの実践を支え合うコミュニティを形成していくと考えます。

保育園・幼稚園・こども園では、11時間の保育を保障している中で、語り合いの時間をどのようにもつかが課題ではありますが、いそがしいからこそあえて語り合いの場を作ることが必要だと思うのです。

保育・教育実践を仲間とともに語り合い、互いの実践を価値づけていくことにより、さらに子どもたちが意欲をもち、自ら様々な事柄と出会い、挑戦しようとする保育を進めていきたいと思います。

幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿(*)

- ①健康な心と体 ②自立心 ③共同性
- ④道徳性・規範意識の芽生え
- ⑤社会生活とのかかわり
- ⑥思考力の芽生え
- ⑦自然との関わり・生命尊重
- ⑧数量・図形、文字等への関心・感覚
- ⑨言葉による伝え合い
- ⑩豊かな感性と表現



図書館司書より先生にすすめたい一冊

『じぶんのきもち みんなのきもち』

サラ・オレアリー／さく あかね書房

転校した日に「おとこのこ？おんなのこ？」と聞かれた子は、「どっちでもいいじゃん！」と思い切って言ってみた。すると、周りの子たちも次々と、本当の気持ちを言ってきて…。

自分の気持ちを素直に伝えることによって、自分も周りのみんなの気持ちを想像することができる。お互いの違いを認めあうことの大切さを教えてくれます。

《図書館 西堀直美》



『ぼくたちのいばしょー亀島小多国籍探偵クラブー』

藤田浩平／作 酒井以／絵 文研出版

春馬と秀則が所属する新聞委員に、ネパールからの転校生、サラダが加わった。サラダに日本語を教え、春馬たちはネパール語を教わる「修行」を行ううちに、いつしか友情が芽生える。そんなとき、3人の前に次々と事件が起こり…。

人との出会いや交流を通して生まれた決意や覚悟は、様々な奇跡を起こし、誰かが引いた境界線をも超えていく感動を与えてくれます。

《図書館 小島美紅》

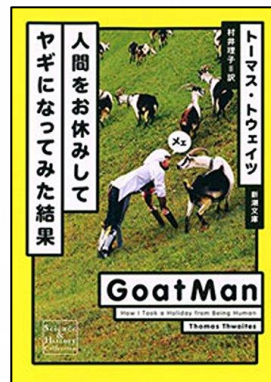
『人間をお休みしてヤギになってみた結果』

トーマス・トウェイツ／著 新潮社

仕事もプライベートもパツとしない僕。人間特有の「悩む」ってやつを数週間だけ消したいーそうだ、ヤギになろう！ヤギを解剖して四足歩行の研究、草を消化するための装置の開発、医者が止めるのも聞かず脳への磁気刺激を繰り返す。

バカバカしい取り組みに大笑いしながらも、探求心と情熱があればなんでもできる！と勇気をもらえる一冊です。

《図書館 大矢真由美》



『6カ国転校生ナージャの発見』

キリーロバ・ナージャ／著 集英社インターナショナル

環境が変わると、ガラッと変わるものは？——答えは「ふつう」。学校で使う筆記用具も、ノートへの名前の書き方も……世界にはたくさんの違いがあります。6歳から15歳まで、6カ国の学校を転々としたナージャが、自らの体験や大人になって考えたことを語ります。この本を読んだら、今まで「当たり前」と思っていたことが、ちょっと違って見えてくるかもしれません。

《図書館 玉川真弓》



『豊かな自然と地域の方に包まれて』 栗東市立金勝第1幼稚園

本園は、田畑や野山が広がる豊かな自然環境に包まれた地域にあり、園外に出ると四季折々の自然を見たり触れたりすることができます。自然を通して地域の方の温もりにも包まれ、“竹やぶ見学”や、“こんこん山”での自然体験、また、栗東の特産物である“いちじく畑の見学”など、5歳児を中心に長きに渡り貴重な体験をさせていただいています。

春に出掛けた竹やぶ見学では、たけのこ掘りを体験しました。なかなか掘り出せないところを地域の方に協力いただき大きなたけのこを掘り出した子どもたちは、達成感で笑顔が溢れていました。また、大きなたけのこを3人がかりで持ち上げたり、数週間後に再び竹やぶに出かけた時には、以前よりも大きく生長した竹と背くらべをしたり、全身でたけのこに触れ、驚きや発見でいっぱいでした。

こんこん山では、丸太の一本橋を渡ったり斜面をロープを使って登ったり自然の遊具を見つけて遊びました。自然の中の遊具は、なかなか難しく特にロープで斜面を登ることは、ロープの使い方から苦戦。それでも一歩一歩足をふんばりながら登る子どもたち。途中、力尽きて落ちそうになったり、登れなくて悔しそうにする子もいましたが諦めず繰り返すことで、なんとなく登るコツがわかり、あと一足を保育者が支えることで登りきる姿がありました。登りきると嬉しくて「もう一回する!」と言い、挑戦する子の列はいつまでも長く続いていました。

自然に囲まれているといっても、このような自然の中で発見したり、自分なりに挑戦したりする機会はなかなか日々の生活ではできないのが現状です。子どもたちの豊かな感性や主体性を引きだせるよう、私たち保育者は、保護者の方、地域の方と共に貴重な環境を保育に生かし関わっていきたいと思います。



『目的や意図に応じた表現ができる子ども』 栗東市立金勝小学校

本校では、「瞳を輝かせ めあてをもって やりぬく金勝っ子」を学校目標とし、その実現の一方策として、表現力の育成に重点を置いた教育活動を推進しています。



たてわり班活動



金勝っ子集会(ダンス発表)

6月より、児童の交流場面を広げています。全校の児童について、異学年で構成した12の班をつくり、その班ごとに「たてわりあそび」を実施しました。各班、メンバーの自己紹介の後、円陣に座ってボールを回す「爆弾ゲーム」などの遊びをしました。リーダーの6年生が進行役や遊びの説明役を務め、6年生の活躍の場が広がるとともに、異学年間の交流が進みました。

また、7月には、「我こそは」と自らエントリーし、得意なことを発表する表現の場「金勝っ子集会」を実施しました。本来、全校集会の形態をとりたいところですが、感染症や熱中症対策のため、オンラインによる画像を通じた発表としました。ダンス、リコーダー発表、なわとび、独唱等々を、個人で、グループで全校に向けて発表しました。

人との交流を重視した表現の機会を工夫することにより、その場や個人の目的や意図に応じた表現ができる子どもの育成を図っていきたいと考えています。